

# 小金井桜繰り返し見物

## 文人の 武蔵野

文化年間(1804~18年)に入ると、桜見物のために小金井を訪れる人の数が飛躍的に増加し、訪問記を通じてリピーターの存在も確認されるようになります。漢詩人の中村亮は、文化2年(1805年)3月13日、小金井橋近辺に桜見物に訪れ、リピーターならではの感慨を記しています。

4年前の寛政末年(1801年)に訪れた時には、水音と鳥の声だけが聞こえるばかりで、桜が見事に咲き誇っているにもかかわらず辺りには

### 中村 亮



「名勝小金井桜」の記  
念碑(小金井市で)

寥々たるものであり、わざわざ江戸から桜見物に来る人など年に数人であると地元の人でも証言していたものだ。しかし、今回は雨にもかかわらず人出が多く、驚愕したという趣旨のことを「金橋詩草」の「序文」(今浜通隆訳による)で述べています。

また、享和元年(1801年)に「そも、川崎大人の花植多しより、年は五十余りも経ぬれど、誰知れる者無し」と記していた屋代弘賢は、5年後の文化3年(1806年)2月26日に小金井橋を再訪し、40~50人の人出を確認しています。そして「この花は小金井橋にて見るを優れたる」(「小金井乃記」と書いています。

その2日後の2月28日、いよいよ林述斎と佐藤一斎の一行が小金井橋を訪れ、桜を見物する日を迎えます。まもなく一斎は「小金井橋観桜記」をものします。

「忽ち一の大樹の前に竦立するに遇ふ。狂風の欻として、飄片の撩乱して雨のごとく下れば、渾身は冷絶す」(突然に、そそり立った一本の桜の太木が眼前に現れ出たのである。突風がにわか吹き起るやいなや、舞い散る花

びらが入り乱れ、まるで雨のように降って来て、へあまりの美しさに、全身に身震いを覚えるのだった」と、感動を文学的に描写しています。

現在もある「小金井桜樹碑」の選定を大久保狭南が行ったのがその翌年頃(文化4~5年)のことであり、建立されたのが没後の文化7年のことでした。佐藤一斎が「小金井橋観桜記」(1806年)を通じて「武州西境」の小金井桜の素晴らしさを世に広め、当代随一の学者が格調高い漢詩文で描いたことにより、江戸御府内中の評判も、お墨付きのものとなりました。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。